

浅田栄次と青山学院

左近 豊（国際政治経済学部教授・宗教主任）

本稿では、青山学院の歴史に消えない足跡を残し、天に宝を積んでいった一人の人物を取り上げたい。

府中にある東京外国語大学の中庭に一つの記念碑が建てられている。2001年の建立除幕式の際には米国・シカゴ大学総長のD.M.Randel博士が祝辞を寄せている¹。東京外国語大の前身である東京外国語学校が高等商業学校（現在の一橋大学）から分離独立した1899年、英語科教授、教務主任となって、日本の外国語教育の基礎を築いた浅田栄次という人の功績をたたえて建てられたものである。

この浅田教授という人は、シカゴ大学で最初に博士号を授与された人であった。日本人で最初というだけでなく、これまでに100名以上のノーベル賞受賞者を輩出し、経済学や物理学、人文学の分野で有名なシカゴ大学の博士号第一号であった。しかも、その博士論文は『ゼカリヤ書1-8章のヘブライ語本文研究：諸古代語訳との比較』という旧約聖書学の研究であった。

英語教育と聖書研究、浅田栄次という人の生涯を貫いた2つの軸。その2つとも、青山学院と深い関わりがあるのだ。浅田は1865年に山口県徳山に生まれ、京都中学を優秀な成績で卒業して、1884年18歳の時、本格的に英語を学ぶために東京英和学校（青山学院の前身）に入学する。そしてその年のクリスマスに神田美以教会（現在の九段教会）で洗礼を受けてクリスチャンとなる。東京英和学校に在学したのはほんの2か月であり、洗礼を受けた時には既に官立の工部大学校に転校し、James Main Dixonという英語の教師の家に下宿してDixonの影響が大きかったことも事実だが²、実は転校してからも浅田は毎週日曜日に青山で英語の聖書研究に通っていたのである³。青山

1 浅田栄次著、奥泉栄三郎監修『復刻版 The Hebrew Text of Zechariah 1-8: 旧約聖書ゼカリヤ書1-8の原典比較研究—シカゴ大学開学第1号博士論文—』（文生書院、2001年）、105頁。

2 James Main Dixonは、スコットランド出身の英文学者で、1880年から工部大学校の英語教師、さらに帝国大学文科大学で教鞭を執り、夏目漱石や岡倉由三郎らに英語を教えた人物である。父親が牧師であったことから熱心なクリスチャンとして浅田に多大な影響を与えた。メソジスト関連の著作も残している。共著として*Illustrated History of Methodism*（1900）があり、単著としても*Life of John Wesley*（1902）がある。

3 浅田みか子編『浅田栄次追懷録』（復刻版）（皆川三郎、椎木治男編纂、東京外語会（東京外

学院で信仰の種をまかれて聖書に親しみが芽生えたことは確かなことと言えよう⁴。その後は第一高等中学、帝国大学理科大学数学科で理学数学の才に磨きをかけてゆく。その間も、神田美以教会に毎日曜日礼拝に通い、キリスト教を伝えるために訪問伝道や若者向けの聖書の講義も熱心に行っていたという⁵。そうこうするうちに、得意だった理学数学への思いにまさるキリスト教信仰と神学探究への志が高まってゆく。ついに帝国大学を中退して1888年にアメリカに渡り、シカゴ郊外のノースウェスタン大学文学部に入学する。23歳の時であった。ここで間島記念館に名前残っている間島弟彦や、青山学院と関係の深かった山鹿旗之進などと知り合うことになる。そしていよいよ青山学院で蒔かれた種が芽をふくことになる。すなわち、神学科へと進み1891年には優等賞300ドル（現在の価値にして約100万円相当）を受けて学士（神学）を授与される。さらにニューヨークに移ってコロンビア大学大学院言語学研究科、さらには道を隔てて向かいにあるユニオン神学大学院でセム語（ヘブライ語、アラム語、シリア語など）を修得し、ギリシャ語、ラテン語も修めて1892年にシカゴ大学大学院言語学研究科に奨学金を得て入学し、翌年には、旧約聖書ゼカリヤ書の研究でPh.D.の学位を授与される。齢28であった。

既に浅田栄次の名を各方面から耳にしていた青山学院長の本多庸一が青山学院神学

国語大学同窓会）有志、1996年）、525頁。

浅田栄次についての本格的な論文として野崎晃市『明治キリスト教の需要と変容－浅田栄次の目を通して－』（筑波大学博士（文学）学位請求論文）がある。その中で野崎は「浅田がキリスト教に興味を持ち始めたのはこの学校（著者注：東京英和学校）に在学中のことであった」「浅田は終生このメソヂスト教会系の学校で知った信仰を持ち続けることになる。札幌バンドに洗礼を施したメソヂスト教会宣教師のM. C. ハリスは、浅田とキリスト教の出会いについて『彼は学生時代に青年の救い、すなわち主イエス・キリストに出会った。これは彼の人生にとって最大の出来事であり、これが彼を深く動かし人生設計を変えさせた。……青山学院は彼のような生徒を持ったことを誇りに思う』と述べている」と記している。東京英和学校に派遣されていた宣教師の中で、J. O. SpencerとJ. S. Vailとは青山学院、神田教会時代を通して晩年まで交際があったことも、浅田と青山学院との深いつながりを示している（野崎、前掲論文、10－11頁参照）。

- 4 「私はこの極東の島で生まれ、全くキリスト教の影響の圏外にあった。若い時には家族礼拝など知らなかったし、町にはキリスト教の教会もなく、また説教を聞く機会もなかった。私は東京英和学校——青山学院は以前そう呼ばれていた——に入学して初めてキリスト教と接触した。わたしはこの学校に英語を学ぶだけのために来たのだが、それは英語以上の何かを学ばせてくれた。教育を通して、より正確に言えば本を通して、私は他のどんな手段によるよりもキリスト教について学んだ。……その後、私は聖書を冷静な目で、批判的に、むしろ欠点を見つけようと読んだ。しかしルカの福音書二三章三四節の主の言葉「父よ彼らをお許し下さい。彼らは自分が何をしているのか知らないのです」という言葉を読んだ時に、私の心は震え「この精神こそキリスト教だ」とつぶやいた。」（野崎、前掲論文、10－11頁）

- 5 石坂龜治著「2つのおもひで」（浅田みか子編、前掲書）、589－591頁。

別所梅之助「神田教会時代の浅田栄次氏」（浅田みか子編、前掲書）、593－594頁。

部教授への就任を要請し、浅田氏は青山学院で旧約聖書学を講じることとなる。最先端で世界的にも優れた研究者として浅田教授は教室でも、学外での聖書に関する講演でも引っ張りだことなる。内村鑑三が有名な「後世への最大遺物」の講演をしたキリスト教青年会主催の第六回夏期学校（箱根）で、浅田も当時のキリスト教指導者たちの一人として「聖書論」というタイトルの講演者に選ばれている⁶。18歳の時に青山学院で蒔かれた信仰の種は大輪の花を咲かせ、本多院長の信頼も篤く、1896年には日本美以（メソジスト）教会信徒総代としてオハイオ州クリーヴランドでおこなわれた全米のメソジスト教会総会に本多院長と一緒に出席し、並み居る米国の教会の代表を前に演説をし、喝采を浴びることにもなる。

ただ次第に専門である旧約聖書学者としての浅田教授の、青山学院での居場所は狭められてゆくことになった⁷。聖書学への造詣の深さは、当時の日本では時代の数歩先を行っていたために、十分に受け入れられずに不本意ながらも、神学部で聖書学を講じることができなくなってゆく⁸。それでも秀でた英語力を買われて、東京高等商業学校（現一橋大学）の英語講師として出講するようになり、新設された附属外国語学校（現東京外国語大学）の教授となり、次第に英語教育に軸足を移してゆくことになる。そしてその分野で別の大きな果実を実らせてゆく。

英語教育分野の権威として全国の学校を視察し、文官高等試験（現国家公務員試験）の委員も務めることとなる。八面六臂の活躍をしながら、それでも青山学院には火曜日と金曜日に高等科の英語教員として終生通い続け、青山学院高等科の卒業生が中等教員検定を受ける際に英語試験の免除特権を受けられるよう尽力し、「英語の青山」と称される英語教育の確立に大いに寄与した⁹。卒業生たちの就職の世話をし、就職後も各地に散って英語教師をしている教え子たちを心に留めて、折に触れて叱咤激励し

6 他の講演者として、坂本直寛（坂本龍馬の甥、自由民権運動家、牧師）、大島正健（札幌農学校1期生、同志社教授、セブランス医学校教授など）、松村介石、植村正久（神学者、牧師）、村井知至（東京外国語学校教授）、大西祝（哲学者、早大教授）、元良勇次郎（心理学者、帝大教授）、本多庸一（青山学院長）など。

7 神学部での旧約聖書学講義は1897年を境に辞退を余儀なくされる。本多院長やスーパー神学部主任は浅田の神学部での教授をサポートするが、本多院長のメソジスト教会監督就任（1907年）に伴う院長退任を期に神学部での講義は一切退くことになる。浅田は左近義弼に神学部における旧約聖書講義を委ねた（野崎、前掲論文、21-24頁参照）。

8 岡田哲蔵「浅田栄次君の志を悼む」（浅田みか子編、前掲書）、527-534頁、平岩恒保「故浅田博士公生涯の一面」（同書）、581-582頁、吉岡誠明「恩師浅田教授を追悼す」（同書）、595-599頁、生江孝之「恩師浅田先生を追悼し併せて予が希望を述ぶ」（同書）、599-603頁。

9 青山学院資料センター所蔵の「高等科 試験を須ずして教員免許状を受領せしむる儀に付願」（本多庸一、ベンジャミン・チャップル、ゼニー・ステヴェンソン・ヴェール、エー・エム・ブルックス、岡田哲蔵、石坂正信、鶴澤聡明、斎藤良一、和田正幾、浅田栄次、高橋丁十郎、ジュリアス・ソーバルの履歴書付）、および同センター資料AA146/A2-3「浅田栄次博士」略歴を参照。

つづけました。

すべてに誠実に、すべての人に真実に、与えられた賜物を惜しみなく捧げ、遣わされた場や働きが本来願ったものでなかったとしても、心を尽くし思いを尽くし精神を尽くして、そこで神の愛に応え続ける。青山学院で種を蒔かれたこの信仰を浅田氏は終生貫き通した。日曜日の礼拝を、どんなに忙しくとも厳守し、必ず家族と一緒に礼拝におられた、とも言われている。(妻・みか子さんは女子学院出身で、女子学院創立者で初代院長の矢島楯子の紹介で浅田教授と結婚した。)浅田教授は、通っていた教会で主任牧師の交代時期の牧師不在の期間には代務者として説教壇に立ってメッセージを語って教会を助けたと当時を知る牧師も述懐している¹⁰。用事や来客があつて教会出席の時間が迫ると自転車にまたがって教会(転会後の青山長者丸教会)に駆けつけることもしばしばだった、と¹¹。

獅子奮迅の活躍の原点にあったものを、高等科時代の教え子是这样語っている。

「(浅田)先生は月に2度位学院の礼拝に立たれる時、旧約聖書の詩篇かイザヤ書を朗々と読まれました。よく通る明瞭で洗練された美しい声、自然な、しかし崇高な読み方、また火のように燃えた眼の光。これらは先生の英語演説や教授において決して見られない或るものの閃きでした。……先生の本領はここにあり、先生の縄張りはやはり旧約聖書でした。外国語学校に百千の子弟を薫陶し、広く全国の英語教育を視察するのは先生には愉快でしたらうが、その実真実に得意とするところは旧約聖書を読み考え伝え説き、そして吾がところ有りとする時ではなかったでしょうか？」

と¹²。青山学院でキリスト教に出会い、青山学院で教え、その道閉ざされて学院の外に働き場を得てなお、青山学院に賜物をささげ続けた青山学院が生み出した偉大な教師であった。

1914年11月10日に東京外国語学校の図書館で倒れ、11日の明け方、49歳で息を引き取った。葬儀は、青山学院講堂で、青山長者丸教会牧師石川和助牧師の司式で、東京外国語学校教授の村井知至の履歴朗読、シカゴ時代からの友人・山鹿旗之進の説教、青山学院第4代院長高木壬太郎、東京英語会会長の神田乃武らの弔辞と共に2000人以上の参列者の見送りを受けてなされた。

高等科の教え子の一人で後に青山学院神学部の教授となった比屋根安定というキリスト教史の大家の心に刻まれている浅田氏を最後に紹介したい。

「(先生は)口癖のように“Beyond the Jordan”、ヨルダン川を彼方に越えて、と繰り返された……。先生は既にヨルダン川を越えて、彼方の美しき御国に移って(逝

10 中川邦三郎(九段美以教会牧師)追悼文、(浅田みか子編、前掲書)、591-592頁

11 平岩、前掲書、582頁。

12 比屋根安定「僕の心に映じた先生」(浅田みか子編、前掲書)、563頁

かれました)。“Beyond the Jordan”先生のあの叫びが、深く心の底に刻まれています。……われら幾年かの後に、我らも先生と共にヨルダンを超えて、彼方の御国に入って、懐かしい先生と積る物語をし、厚き志を語り合い、情を交わし、思いを通ずる時、「先生、あなたの志を嗣ぎました」「……あなたの遺した志を成就し、あなたの遺したことを実行し、またあなたがなしたいと思ってもできなかったあの仕事を首尾よくとげました」と満足して報告し、先生と共に限りなき天の祝福を蒙りたいのです」¹³。

たとえ目に見える記念碑はなくても、青山学院に刻まれたキリストの愛を証しする歩みは、神のもとに刻まれており、その遺してゆかれた働きはタスキのように受け継がれて、いつの日かゴールで共に限りなき天の祝福をいただく幸いを、遥かに望み見る喜びを、指し示していると言えよう。

13 同上、564頁。